

起きて歩きなさい

ヨハネの福音書 5章 1-9 節

はじめに

今日は、今年最後の主日礼拝となります。今年も52回の主日礼拝が守られたことを感謝します。ただ新型コロナウイルスの影響で、52回のうち23回はオンラインで礼拝を守りました。この会堂に皆で集まって礼拝を守ることができたのは、わずか29回だけでした。現在、新型コロナウイルスの変異株が再び世界に広まっています。日本にも少しずつ入り込んでいます。しかし来年は、コロナの影響が最小限に留められて、会堂での礼拝が続けられるように皆さんで祈っていきたいと思います。

さて、今日の聖書箇所には、「エルサレム」にある「**ベテスタと呼ばれる池**」で起きたイエス様の癒しの奇蹟が書かれています。イエス様は、「**ユダヤ人の祭り**」があるというので、エルサレムにやって来ました。

そしてイエス様は、エルサレムの中にある「ベテスタ」と呼ばれる池にやって来たのです。「ベテスタ」というのは、「あわれみの家」という意味で、この池には、3節にあるように、「**病人、目の見えない人、足の不自由な人、からだに麻痺のある人たちが大勢、横になっていた**」のです。

というのは、新改訳聖書の脚注にあるように、この池には一つの言い伝えがあって、「**主の使いが時々この池に降りて来て水を動かす**」というのです。そして「**水が動かされてから最初に入った者が、どのような病気にかかっている者でも癒された**」というのです。この主の使いによる癒しの奇蹟が本当に起きていたのかどうかは分かりません。おそらく言い伝えであって、迷信であったと思います。しかし、大勢の病人たちは、この言い伝えを信じて、この池に集まって来ていたのです。

この言い伝えでは、水が動いた時に池に入った人が全員、癒されるというわけではありません。水が動いた時に癒されるのは、ただ一人だけでした。最初に池に入った人だけでした。この池に集まって来た人たちは、皆が病気を癒されたいと願っている人たちでした。ですから、水が動いた時には、われ先にと皆が池の中に飛び込んで行ったのではないのでしょうか。譲り合う余裕などなく、他人を押しつけてでも池の中に飛び込んで行く、そういう人間の自己中心性がむき出しになるような光景がそこにはあったのではないのでしょうか。周りは病人ばかりですが、この池には激しい競争社会があったのです。

1. 三十八年も病気にかかっている人

その池に集まっていた大勢の病人たちの中に、「**三十八年も病気にかかっている人**」がいた

のです。彼は、生まれつき病気だったのか、それとも人生の途中で病気になったのかは分かりません。彼は、イエス様によってその病気を癒されるのですが、癒やされた後にイエス様は彼にこう言われます。「**見なさい。あなたは良くなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないと、もっと悪いことがあなたに起こるかもしれない**」。彼はイエス様に「もう罪を犯してはなりません」と言われているので、彼の病気は、彼の罪と関係があるのかもしれませんが。もしかしたら、彼の罪が病気の原因となっていたのかもしれませんが。いずれにしても彼は、三十八年という想像も絶する長い年月の間、病気に苦しめられていたのです。

彼が具体的にどんな病気だったのかは分かりません。6節を見ると、彼は「**横になって**」いたとあります。また8節でイエス様に、「**起きて床を取り上げ、歩きなさい**」と言われるので、彼の病気は自分で歩けない病気であったようです。足が不自由であったのか、からだに麻痺があったのかは分かりませんが、とにかく自分では歩けず、いつも横になっている状態であったようです。

よく比較されるのですが、「カペナウム」という町で、イエス様に中風の病気を癒された人がいます。彼もイエス様に、「**起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい**」(マルコ2:11)と言われます。両者とも、イエス様に「起きて床を取り上げ、歩きなさい」と言われるのです。しかし両者には、決定的に違うことがあります。それは、カペナウムの中風の人には、四人の友人がいて、彼のために屋根をはがして穴を開け、寝床をつり降ろしてまでイエス様のもとに連れて行ってくれた人たちがいたのです。しかし、ベテスダの池にいた三十八年も病気にかかっていた人には、友人がいませんでした。彼は7節で、「**主よ。水がかき回されたとき、池の中に入れてくれる人がいません。行きかけると、ほかの人が先に下りて行きます**」とイエス様に言っています。彼には、彼の病気を心から心配し、彼を助けてくれる人がいなかったのです。

彼は、三十八年という長い年月の間、病気に苦しんでいました。彼は寝たきりで、自分で歩くことができませんでした。しかし、彼を心配してくれる人、彼を助けてくれる人がいなかったのです。彼の周りには、自分の病気のことで精一杯の人たちしかいなかったのです。

そのような中で、彼はこの池の言い伝えを信じていました。しかし、水が動いた時に、真っ先に自分を池の中に入れてくれる人、自分を助けてくれる人がいなかったのです。彼は、この池の言い伝えを信じ、微かな希望を持ちながらも、自分を助けてくれる人がいないという現実の中で、絶望していたのではないのでしょうか。

2. 池の中に入れてくれる人を求めていた

イエス様は、そんな彼に目を留められます。この池には大勢の病人たちがいましたが、その中でも特に長い間、彼が病気に苦しんでいることを知ったからです。彼がいつからこの池にいたのかは分かりませんが、とにかく彼は長い間、現実には絶望しながらも、微かな希望を抱いて、この池に留まり続けていたのです。

そんな彼にイエス様は、「**良くなりたいか**」と声をかけられます。三十八年もの長い間、病気に苦しんでいる人が、良くなりたくないわけがありません。しかし彼はイエス様に、「良く

なりたいです」とは答えませんでした。彼は、「主よ。水がかき回されたとき、池の中に入れてくれる人がいません。行きかけると、ほかの人が先に下りて行きます」と答えます。彼が答えたのは、「良くなりたい」とか「良くなりたくない」とかではなく、目の前の現実に対する絶望の言葉です。

彼は、この池の言い伝えを信じていました。そしてこの池に希望を持って生きていました。そして、水が動いた時に、誰よりも先に自分を池の中に入れてくれる人を求めていたのです。イエス様が彼に声をかけた時、彼はイエス様こそ自分を池の中に入れてくれる人だと期待したのかもしれませんが。彼は、イエス様がどんな人か知りませんでした。彼は、イエス様に癒された後、人々から「床を取り上げて歩け」とあなたに言った人は誰かと聞かれた時、彼は答えることができなかつたのです。イエス様のことを全く知らなかつたからです。彼は、イエス様が神の子であることを知りませんでした。彼は、イエス様に対する信仰を持っていませんでした。彼が持っていたのは、この池の言い伝えに対する信仰だけです。

彼がイエス様に期待していたことは、自分を池の中に入れてくれることです。自分を助け、この池の競争社会の中で勝たせてくれることです。彼は、イエス様に希望を持っていたのではなく、この池に希望を持っていたのです。

3. 起きて床を取り上げ、歩きなさい

しかしイエス様は彼に、「それなら、わたしがあなたを、誰よりも先に池の中に入れてあげよう」とは言われませんでした。イエス様は彼に、「起きて床を取り上げ、歩きなさい」と言われたのです。そうして御自身の言葉によって、彼の病気を癒されたのです。イエス様は、彼を池の中に入れて癒すのではなく、御自身の言葉によって癒されたのです。

イエス様は彼に、「良くなりたいか」と尋ねました。しかし彼は、自分が良くなる方法は一つしかない、自分が良くなる方法はこの池の中に誰よりも先に入ることだと信じて疑わなかつたのです。しかしイエス様は全く別の方法で、彼を癒されたのです。池の力ではなく、御自身の力によって、御自身の御言葉によって彼を癒されたのです。イエス様は彼に、「良くなりたいか」と聞かれた時、「良くなりたいたら、わたしを信じ、わたしに希望を持ちなさい、またわたしの言葉に耳を傾けなさい」と言おうとされたのではないのでしょうか。

彼はイエス様を知りませんでした。イエス様が神の子であることも、全知全能の神御自身であることも知りませんでした。彼はこれまで、「良くなる方法」を間違えていたのです。彼は、この池の言い伝えを信じて、この池に希望を抱いて生きてきました。しかし彼は本来、イエス様を信じ、イエス様に希望を抱くべきだったのです。この池の言い伝えを信じて、この池に希望を抱いて生きてきた彼は、何を得たのでしょうか。彼は、現実に絶望するしかなかつたのです。彼は、信ずべきものを、希望を抱くべきものを間違えていたのです。そのことを教えるために、イエス様は彼に目を留め、彼に声をかけられたのではないのでしょうか。「あなたが信じ、希望を抱くべきものは、この池ではなく、わたしであり、わたしの言葉である」、イエス様は彼に、そのことを教えようと言われたのではないのでしょうか。

彼は三十八年という長い間、この池を信じ、希望を抱いて生きてきましたが、全く別のものによって癒され、立ち上がり、歩き出すことができたのです。それは、イエス様ご自身であり、イエス様の御言葉だったのです。

おわりに

この出来事から私たちに問われていることは、私たちは何を信じ、何に希望を抱いて生きているのだろうかということです。私たちは、イエス様を信じ、イエス様に希望を抱いて生きているだろうか、それともベテスダの池の言い伝えのように、イエス様以外のもの、この世の価値観、人々の言い伝えなどを信じ、希望を抱いて生きているでしょうか。

この出来事が私たちに教えていることは、私たちが信じ、希望を抱くものを間違えてはならないということ、私たちが信じ、希望を抱くべきものは、イエス様ご自身であり、イエス様の御言葉であるということです。イエス様は、私たちに「良くなりたいか」と問われます。私たちがもし「良くなりたい」、「変わりたい」と願うなら、ベテスダの池ではなく、イエス様を信じ、イエス様の御言葉に耳を傾け、イエス様の御言葉に聞き従わなければなりません。イエス様の御言葉こそ、私たちを絶望の中から立ち上がらせる力があるのです。イエス様の御言葉こそ、絶望の中から私たちに希望を与えてくれるものです。イエス様の御言葉こそ、もう一度、人生を歩んでいく力を与えてくれるものです。

9節を見ると、この出来事が起こったのは「安息日」であったとあります。この出来事を通して私たちは、安息日は、イエス様が御言葉を通して私たちを癒し、私たちを立ち上がらせ、私たちに歩き出す力を与える日であることを教えられます。私たちの安息日は、日曜日です。そして私たちは、日曜日に集まって礼拝をささげます。礼拝を通して私たちは、魂が癒され、もう一度立ち上がり、新たな一週間を歩む力を与えられるのです。安息日は、私たちが癒され、立ち上がり、歩き出す日です。そのために、私たちはイエス様の御言葉を聞くのです。

イエス様はこう言われます。「**すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです**」(マタイ 11:28-30)。

私たちは、ベテスダの池ではなく、イエス様ご自身を信じ、イエス様の御言葉にこそ、聞き従っていきましょう。そこにこそ、私たちの本当の安らぎ、立ち上がる力、歩き出す力があるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

イエス様こそ全知全能の神であり、イエス様にこそ、私たちの希望、安らぎ、力があります。私たちが、ベテスダの池のようなものではなく、あなた御自身に、またあなたの御言葉を信じ、希望を抱いていくことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。